

幼児の遊びの教育序論

黒田成子



すべてのことがあらためて根源的に問いなおされている現今にあって、もし子どもたちが大学生のような流行の表現方法をとることができるとしたら、きっと、幼稚園とは何か？ 保育所とは何か？ その構成員は誰か？ 先生たちがやたらにつかうことば「保育」とか「幼児教育」とか「社会性」とか「遊び」とはいったい何か？ その正体は何だろう？ という問いかけがあるのではないかと想像している。

そう思いながら子どもたちの遊ぶようすを見ていると、遊びとは何かという疑問がますます深くなってくる。そこで今回はこのような題名を与えられたのをよいチャンスに、日頃つかい慣れているが、なんとなくハッキリしない「遊び」について考えてみることにした次第である。

最近の保育界では遊びという概念が実にまちまちである。保育の現場においてさえ、遊びということばをいろいろの意味でつかっている。たとえばある園では「さあー、お遊びをしましよう」と先生がやさしい声でゲームを教える。少し飽きてガヤガヤしてくると先生はおこったような調子で「さ、みんな外へ行って遊んでおいで！」という。先生が研究会発表会で報告する時には「遊びというものは、幼児の人格形成に欠くことのできないものです。わが園でとりましたアンケートによりますと……」と喋っている時の「遊び」は、何か充実した意味をもっているように聞こえる。

若い保育者が「子どもの生活は遊びそのもの、遊び中心とした保育をやりたい」というと年輩の園長はたいいてい反対する。

あるいは「現代の社会では実業界の面においても、科学、學術の面においてもよく訓練された新人の養成が期待されている。

そのような時代の要求と幼児教育は無縁ではないはずである」などと、会社の社長のいいそうなことを述べ、幼児期から訓練しておかなければならないことがある、だから、ただ遊ばせて放任しておくことはよくないということになるかもしれない。

また、保育方法を論じる指導者の中にも、子どもを自由にさせ、放任しておくだけではけつしてよい効果は表われない、むしろ子どもの発達にそくした教材を系統的に与え、子どもの認識を高めていくことが必要である、その場合遊びは大切であるが、それはさらに統制場面で生かされなければならない、という主張がある。私も放任からは何も教育的なものを生じないと思うが、一般に遊び即ち放任と考えることは早急であると思う。

ともかく遊びということばのひびきには一般に解放されたものの、身勝手なもの、本来的でない余分なもの、まじめでないものの、生産的でないもの、暇つぶし等々の好ましくない感じがあることは残念である。遊びを好ましくないと思うのは、おとなが仕事ということと対比して考えるからではないだろうか。仕事は生産的で意味のあるものだが、遊びは暇がきたらするものであって、してもしなくてもよいものである、というところ

から出てくる考えかもしれない。

しかし、幼児の遊びを教育の過程においてとらえようとするとき、かならずしも遊びとはこのように好ましくない面ばかりをもつものであるとはいえないと思う。むしろくりかえしいっしょうけんめいに遊びにうちこむことが、主体的に徹底した仕事をすることへつながることにもなるのである。殊に幼児は、遊びも仕事も未だ分化されない特質をもっていることを考えると、なおさらこのようにいえるのではないかと思う。

「遊び」については、古から多くの学者たちがさまざまな学説をとなえている。ホルルの反復説やグロースの本能練習習説等、遊びについては、人間それ自身が複雑であると同一位複雑な解釈がなされている。その中で子どもの立場にたつて遊びについて主張している学者は非常に少ない。

すでに一九六八年に故人となった米国の発達心理学者のローレンス・フランクによれば「遊びとは本質的にいってパーソナリティの発達である。この発達により、この世の生を受けた個々の有機体は、やがて社会秩序のある象徴的文化世界の中に積極的に生活する人間となっていくのである」

彼によれば遊びとは人間そのもの全人的な発達であり、子どもは自分なりの経験をくぐって、自分自身を新しく発見してい

くのである。

遊びとは一つの学習活動である。しかも保育者の側から与えられるのではなく、子ども自身の中から出てくるものである。子ども自身の側から出てくるのが大切だ、といいながら実際は保育者のアイデアを仕組んで、あたかも子どもの側から出てきたように考えられることがある。単元活動にはこのようなことがよく見られる。

たとえば、保育者が子どもの遊びの状態をよく見きわめながら、そこから自然に興味の中心を拾いあげ、これを中核としながら、単元構成をしていく場合は、まだ子どもの考えがいかにされている。

しかし、子どもが興味をもったわけでもないのに、保育者の方で巧みな導入によって子どもをそのテーマに引き入れていく方法にはプラスの面もあるが、マイナスの面もかなりある。保育者が興味を仕組むというのか、ともかく人為的な技術により子どもを指導し、子どもはその気になり、あるときはほんとうにおもしろみを感じてその単元が何日も持続することもある。けれども、あるときは子どもたちが全然興味を示さず、その保育は軌道にのらないまま、保育者の一人ずもうで無意味に終わってしまうことがある。

いずれにしてもこれはおとなの側で用意された興味であって、少なくともスタートにおいては子どもから出たものでないといえよう。子ども自身を形成していくための遊びというのは純粹に子どもの側から発生してくるものであってほしい。

それにはおとなの側の、こう教えなければならぬ、これはどうしても在園期間中にやっておかなければならない、いわゆるミニママ・エッセンシャル的なものをやっきになって考えている姿勢に固執している限りは自発性にもとづいた遊びなどといったもそれは空文にすぎないだろう。

ある幼稚園で、長い伝統のあった一斉的な保育形態を遊び中心の保育に変更したことがあった。その理由としては、保育の形式的なものを解体して遊びを中心とした保育にした方が、子ども一人一人のもっているものを自由に伸ばすことができるだろうということであった。各組の仕切りの一部分がはずされ、園舎は大きなホールとなり、製作コーナー、粘土コーナー、積木コーナー、ままごとコーナー、広い砂場(外)等々ができ、保育者たちは二週間交替でコーナーの担当をはじめた。子どもたちは登園した時から十一時頃まで、それまでであった始業のチャイムによって遊びを中断されることを心配せずにゆっくり遊べることになった。

新しく年長組となった子どもたちは、前年度までの習慣がおどろくほどしみこんでいて「好きなだけなんでもして遊んでいいのよ」と何度いっても、大まじめな顔つきで「先生、まだお集まりじゃないの?」とか「先生、絵かいてもいい?」とかいちいちたずねにくる。これにくらべ、新入の年少組の子どもたちは、幼稚園とはこのように好きなことをして遊べるどころと最初から思っていて、むしろそのことしか知らないで、適応のできない数名の子ども以外は、何の拘束も感じないかのように安定して遊んでいる。年長児の方が「小さい組の子がボクたちの道具をつかっている」などといいつけにきたりする。

その園の先生たちは一方的な指導計画や単元設定などという既成概念から自由になりたいと考えているのだったが、実際には子どもたちがなかなか自分たちから遊びにのってこないのので、少々あせりぎみになっていた。時は五月、子どもの日を前に一斉に鯉のぼりの製作でもすべきであったかもしれない。しかし根気強く待っていたところ、連休でいろいろの経験をして戻ってきた子どもたちが思い思いの遊びをはじめた。

積木のコーナーでは、数名の男児が積木で車庫のようなものを造りはじめた。先生たちは子どもの側から何かが出てくるまで辛抱よく待っていた。車庫らしいものは実はお風呂屋さん

だったりした。子どもの人数も次第にふえ、入口、脱衣所、洗うところ、水道、湯舟の中の一段と高くなっているしくみなど、子どもたちは夢中になって造っている。銭湯のことをよく知らない子どもは、よく経験している子どもにもききながらやっている。先生は所要所で短い助言をする。

他のコーナーでは汽車遊びがはじまり、積木で造った線路は山を越え、川を渡ったりしてひろがり過ぎ、他のグルーブの子どもたちとけんかになっている。製作コーナーでは、ままごとコーナーではじまった食堂のためにごちそうを作ったり、広告やメニューをかいいたりして忙しそうだ。これら一連の遊びは毎日降園する前に片づけられて、次の日登園すると、また用意をして前日のつづきをするということがくりかえされ、何週間もつづいた。ついには先生たちがこれを止めさせたいと思ってもなかなかおしまいにならず、後半ではお風呂やさんでお風呂に入ってから汽車にのって食堂車に入り、終点では遊園地(運動場)に行くというコーナーまでできてしまった。

人間はあまのじゃくにできているものであって、自分自身から興味をもったものには果てしない関心と追求があり、それがまた他のものには、ことに保育者には予測もできないような新しい創造を生み出していくのである。

一例としてひいたこの園では、その後このような大がかりな遊びはそうたびたびは見られなかったそうだし、また、それがかならずしも好いとは限らないが、各コーナーや広場や運動場で子どもが年齢の別なく入り乱れて思い思いの遊びをくりひろげている。

こういう方法について、まず批判がでてくるのは父兄の側からである。先生はらくでしよう、学校へ行く準備ができないのではないか、子どもは勝手気ままになる、能力のある子どもはいいが、ない子どもはどうするか、同じことに熱中してばかりいる子どもはどうなるか、しつけや学力は？ こうした批判はそのまま他の園の保育者たちからもなげかけられる疑問である。

これらの批判については一つ一つ反論することができる。たとえばタイヤ遊びばかりして他のことをしない子どもについては、他の遊びに気持が動くような環境づくりをするとか、時期を待つとか……。しかし、根本をさぐると、遊び中心の保育を支持するものとこれを批判するものとの間には、子どもへの理解の仕方について異質なものがあってはならないだろうか。そうだとすれば保育に対する姿勢も異ってくるし、価値感も違うのは当然だろう。

タイヤ遊びばかりしている一群の男児について、これだけ一

つのことに夢中になって集中できること、タイヤのとめ方や競争方法のくふう、タイヤの大、小によって、速度が異なることの発見、友だちとのやりとりなどいろいろの経験をしているわけだし、今までにできなかった活動を思う存分にできるわけだから、長い目でみればかえって一人一人はバランスがとれているともいえる。(「幼児の教育」第六十七巻第七号参照)

子どもは果たして勝手気ままになっているだろうか。父兄たちがそのように心配するのは、子どもはこうあらねばならないというような、よい子の固定概念を持ちつづけているからではないだろうか。

折り目正しいしつけが要求されるが、それが第一に目ざすものだろうか。第一に目ざすものはそれを行なう子ども自身的人格形式ではないか。おとなはそれを与えることも教えることもできない。ただ影響を与え、開発する努力はできるだろうが、それは環境をととのえ、見守りつつ、適切な助言を与えることである。もちろん保育者も加わって、遊びの形に連けいをついたり、遊びに一役かってその質を深めるように影響つけることも必要である。しかし、好奇心や探究や創造性が出てくることはあくまでも子ども自身の側からのものである。

遊びは教育的過程のあらゆる特質をもっている。おとながど

れほど巧みな誘導をしたとしても、子ども自身が全く自由に、自分から興味をもって選んだ遊びにはかなわない。そこには興味が続くしそれを支える意欲があり、エネルギーと努力がある。いろいろな事実や経験にぶつかるとき、子どもは感動をおぼえて心がはずみ、想像力が刺激され、新しい感じ方、表現などが創造性として表われてくる。楽しくてたまらないという場面もあり、自ら責任感を感じて自己主張をする場合もある。子どもは遊びを通して自分の個性を伸ばし、また集団の一員としてどのように生活していくことがよいかを学びとっていく。

教師であるものは誰でもまず、相手に何を教え込むかという勢い込んだ姿勢をとりやすいものである。この気負った一種の構えをいちおう捨てるのは、かなりの勇氣と決断がいることである。それは徹底して子どもの尊厳を認めることから始まる。けつして子どものいいなりになったり、甘やかしたりすることではなく、対象である子どもが真に何を求めているかを知ろうとする努力を要する。

私はよく遊びには理論がないとか、系統性がないとか、遊ばせておくだけでは効果が上がらないとか、批判する父兄や評論家の先生方に、実際に遊びに没頭している子どもたちとともに生活していっしょに考えたり、行動してみたい気持ち

がする。それは非常に努力と忍耐を要する実に気長な作業である。しかし、ひとたび子どもの側にたつてもものを見たり考えたりすることができるようになると、何ともいえない共感と充実感と喜びがおとなの心にも湧き上がってくるものである。ほんとうの遊びは、放任とか学校の合い間の待ち時間とは、たどえ形は同じに見えてもその内容は似ても似つかないものである。

以上、十分ではないが、遊びについて私なりの考えを具体的な例をひきながら記してみた。実際の園生活の中では一斉的に保育する場面もかなり必要であろう。もっとフォーマルな学習やしつけとの関係もあらためて考えてみたいと思っている。

(東洋英和女学院短大)

お知らせ

これまで毎年六月に開いてきた「幼児教育実務指導研究会」は、時季が適当でないと考えた結果、六月にしないで、秋に行なうことになりました。詳細については、きまり次第、追って本誌上に掲載します。

お茶の水女子大学附属幼稚園内 幼児教育研究会

幼児教育講習会予告

日時 昭和45年7月22日(水)～25日(土)

会場 お茶の水女子大学講堂・体育館

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会